

§ ワクチン関連トピックス

1. 予防接種制度の見直しについて第二次提言がまとめられる

7種類のワクチンの定期接種化に向けて、2012年5月23日に開催された厚生科学審議会感染症分科会予防接種部会で第2次提言がとりまとめられました。

詳細は、厚生労働省のホームページ <http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r9852000002b6r0.html> (2012年5月時点URL) に掲載されています。<厚生科学審議会感染症分科会予防接種部会における予防接種制度の見直しについて(第二次提言)>の概要は、「○医学的観点からは、7ワクチン(子宮頸がん、ヒブ、小児用肺炎球菌、水痘、おたふくかぜ、成人用肺炎球菌、B型肝炎)について、広く接種を促進することが望ましい。○新たなワクチンの定期接種化には、継続的な接種に要する財源の確保が必要である。○子宮頸がん、ヒブ、小児用肺炎球菌の3ワクチンは、平成25年度以降も円滑な接種を行えるようにする必要がある。(感染症エクスプレス@厚労省

Vol.50より抜粋)」とされています。

2. 不活化ポリオワクチンの導入について

海外で生産されている単独の不活化ポリオワクチン(ソークワクチン)が2012年4月27日に薬事承認されました。今後は予防接種実施規則の改正、パブリックコメントの実施を経て省令改正の公布、市区町村での接種体制の構築、国家検定の実施、ワクチンの包装・国内での発売・流通等が準備され、2012年9月1日から定期接種に導入の予定とされています。

一方、国内で開発され世界で初めてとなるセービン株を不活化したポリオワクチンと国産のDPTワクチンを混合した4種混合ワクチンについては、2011年12月27日および2012年1月27日に2社からそれぞれ薬事申請がなされ、2012年5月現在、薬事審査中となっています。

不活化ポリオワクチンが定期接種に導入された後は、現在使用されている生ポリオワクチンは定期接種として使用されなくなりますが、近

年、定期接種である生ポリオワクチンの接種率が低下しており、2011年度の感染症流行予測調査によると、0～1歳児の中和抗体保有率が低下しています（図1：○印）。

また、昭和50～52年生まれの人々の1型ポリオウイルスに対する中和抗体保有率が低いことが指摘され、ワクチンの接種が推奨されてきましたが、抗体保有率は徐々に増加しており、1990年代の前半には40～50%程度であった抗体保有率は2011年度の調査では70%台まで上

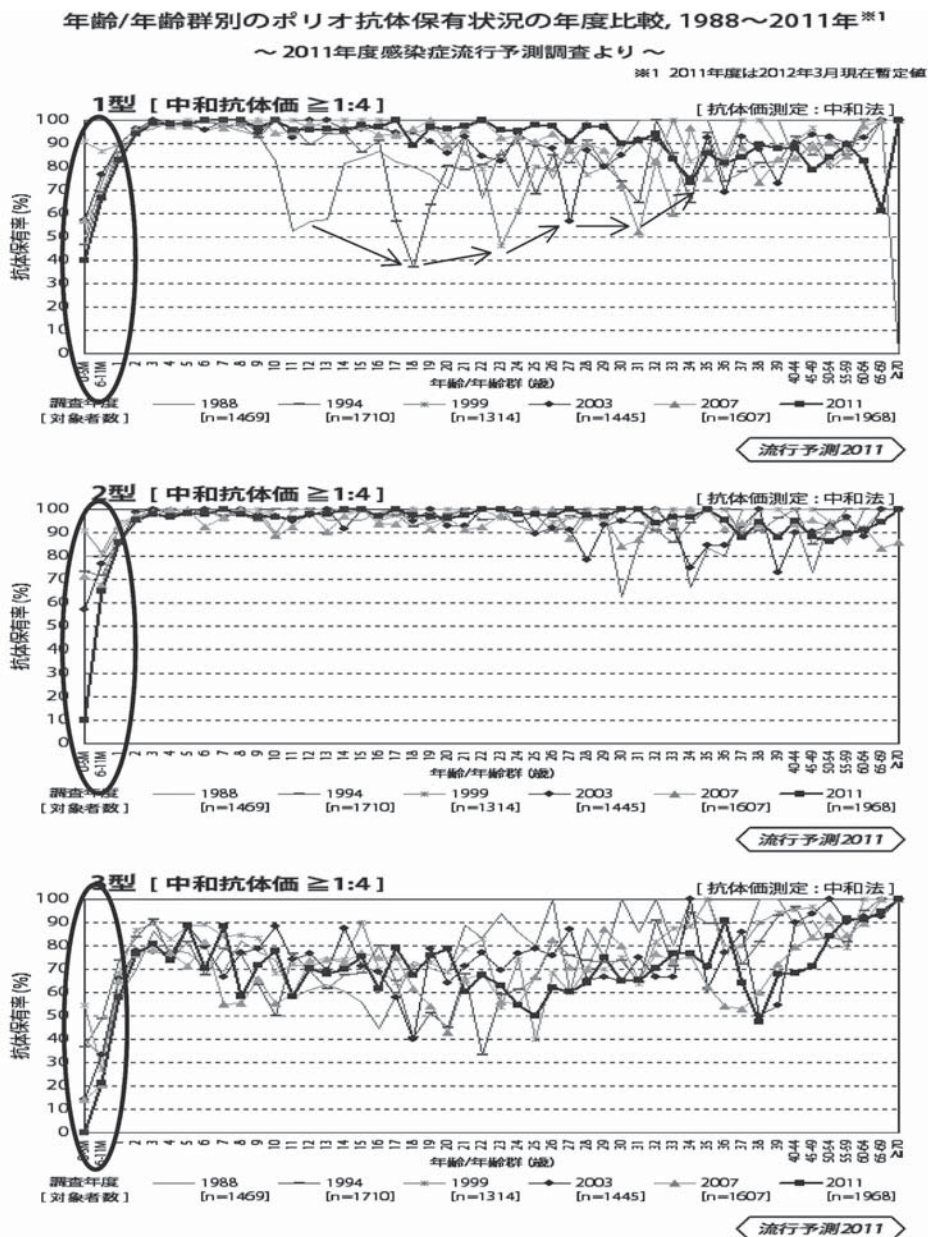
昇しています（図1：矢印）。

不活化ポリオワクチン導入に関する詳細な情報は、厚生労働省のホームページ <http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/polio/>（2012年5月時点URL）に、＜ポリオワクチン＞としてまとめられています。

3. 風疹の地域流行について

感染症発生動向調査によると、2011年から風疹の地域流行が認められ（図2：上段）、当該地

図1



域を中心として注意喚起が行われてきましたが、2012年は近畿地方を中心に流行が継続しており(図2:下段)、2012年第15週現在、昨年同時期の約2倍の報告数になっています(図3)。

これをうけて、2012年5月25日に厚生労働省健康局結核感染症課から全国の都道府県、保健所設置市、特別区の衛生主管部(局)にあてて「風しん患者の地域的な増加について」という内容の事務連絡が出されており、風疹に対する対策の強化が求められています。

1977年から1994年まで女子中学生のみを対象として風疹の定期接種が実施されていたことから、2011年度の感染症流行予測調査で、30～50代前半の男性の風疹ウイルスに対する抗体保有率が80%程度と低い状態であることが確認されています(図4:○印)。

その結果、2012年に報告されている風疹患者

は多くが予防接種歴なしあるいは接種歴不明の成人男性となっています(図5:感染症週報2012年第15号より抜粋)。

現在、定期接種の対象は、第1期(1歳児)、第2期(小学校入学前一年間)、第3期(中学1年生相当年齢の者)、第4期(高校3年生相当年齢の者)ですが(図4:矢印)、対象者は対象期間の終了間際ではなく、できる限り早めに麻疹風疹混合ワクチンの接種を受けておくことが重要です。

更に、厚生労働科学研究費補助金新興・再興感染症研究事業「水痘、流行性耳下腺炎、肺炎球菌による肺炎等の今後の感染症対策に必要な予防接種に関する研究(主任研究者:岡部信彦・国立感染症研究所感染症情報センター長)」の分担研究「風疹流行にともなう母児感染の予防対策構築に関する研究班(班長:平原史樹横浜市立大学大学院医学研究科教授)」として、2004

図2

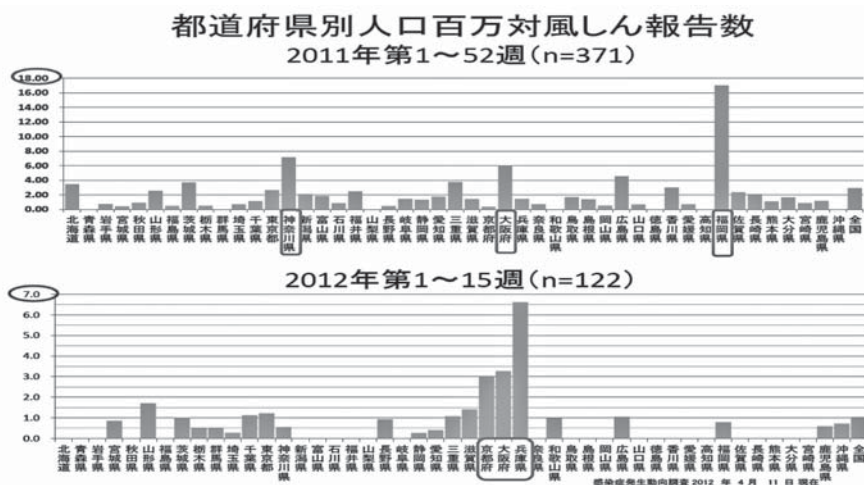


図3

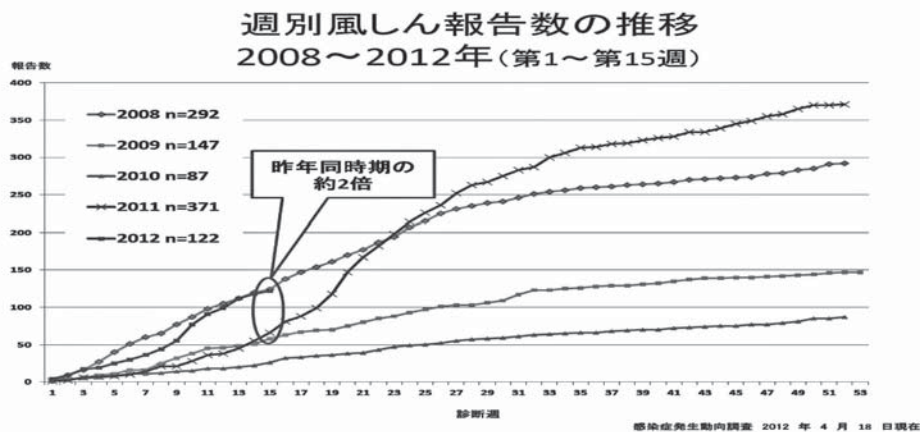


図4

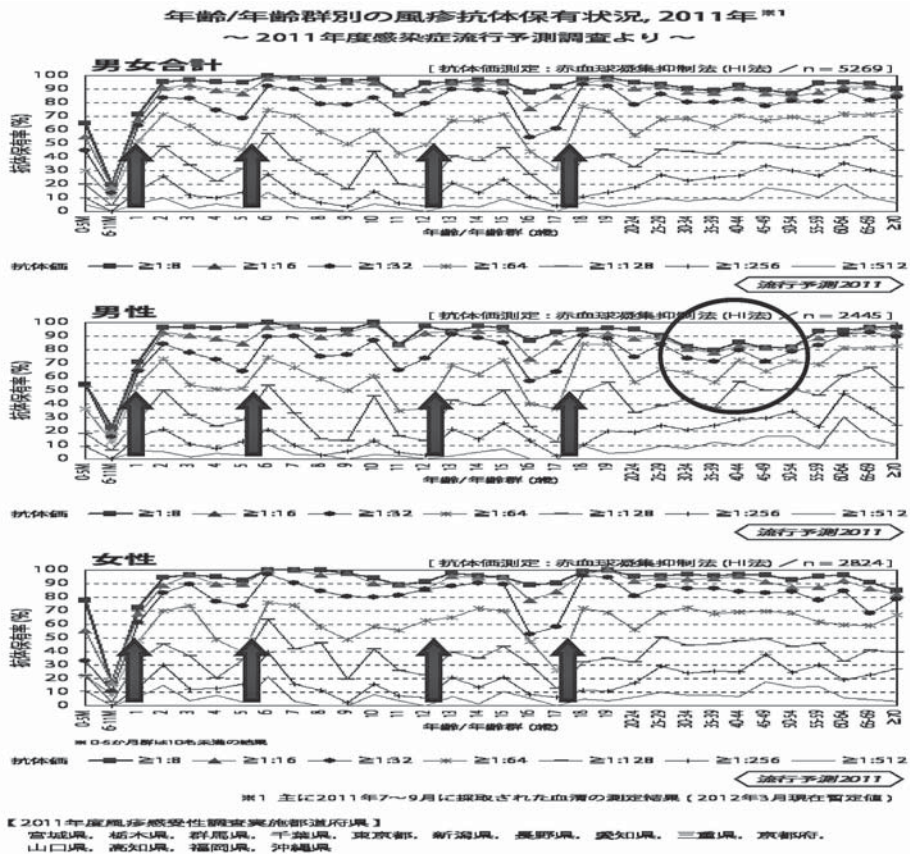
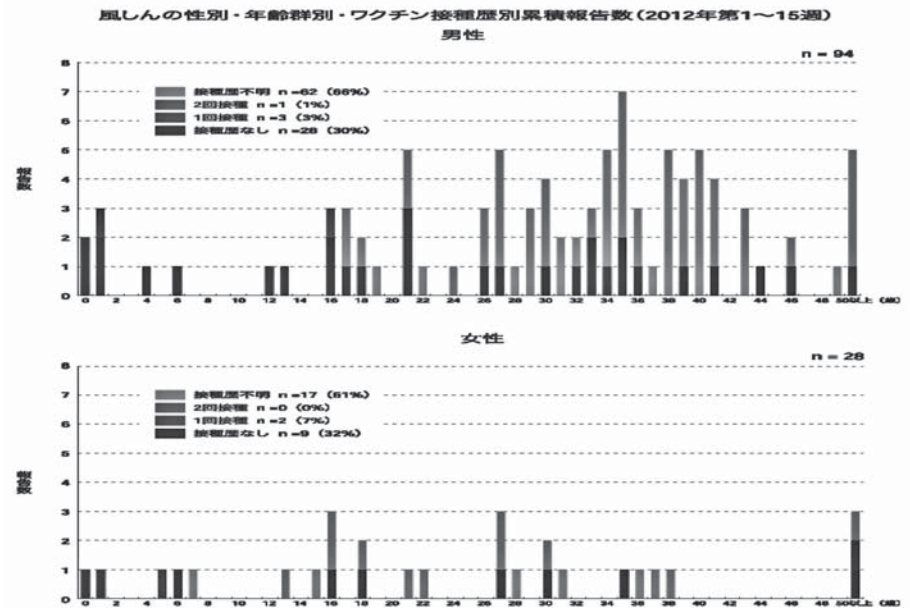


図5



年の風疹流行時に出された「風疹流行および先天性風疹症候群の発生抑制に関する緊急提言」<http://idsc.nih.go.jp/disease/rubella/rec200408rev3.pdf>を参考に、妊婦の夫、子供及びその他の同居家族への風疹予防接種の勧奨と、定期接種対象者以外で風疹予防接種が勧奨される10代後半から40代の女性、このうちことに妊娠の希望ある

いはその可能性の高い女性、産褥早期の女性は風疹の予防接種を受けることが望まれます。なお、女性が風疹含有ワクチンの接種を受ける場合は、妊娠していないことを確認し、接種後は2カ月間妊娠をさける必要があります。妊娠中は風疹含有ワクチンの接種を受けることはできないので、注意が必要です。